皇位繼承の歴史（六）

信長・秀吉・家康と朝廷「正親町・後陽成・後水尾」

高田　友

毛利元就臨終の際、息三人に說きて、三本の矢の教訓を與へたりとは眞赤なる僞りなり。啞然たり、長子隆元父に先立ちて夭折（一五六三）してありきとは。しかれども、隆元在世せる一五五七年に元就、三子に教訓狀を與へたりとは史實なるべし。

この一五五七年は、京都にては正親町天皇の踐祚あらせられたる年なり。因みに「正親町」とは當時都に存したる町の名なり。皇族の經濟を掌る「正親司」の下僚の宿舍、この町の通りに位置したるがゆゑに「おほきみ（のつかさ）のまち」の轉じて「おほぎまち」とはなれり。「正親司」と書きて「おほきみのつかさ」と訓むは、往昔律令の令制にて定められたり。

遡ること百餘年なる一四二八年、101稱光天皇崩御あらせられ、皇統斷絶せんとす。このときに方り、伏見宮家に崇光天皇四世彦人王あらせられ、俄かに先代100後小松院の猶子となつて大統を繼ぎ給ふ。すなはち、102後花園天皇なり。その後、103後土御門、104後柏原（柏原は桓武帝の異名）、105後奈良（奈良は51平城帝の異名）、父子相傳して登極あらせられ、次いで一五五七年後奈良帝の皇子方仁（一五一七）親王踐祚して106正親町天皇とならせたまふ。此の帝實に三十年に亙りて寶位を保たせたまふ。四十歳にて踐祚、退位は七十歳、崩御は八十七歳にておはしましき。

當時皇室は式微して赤貧洗ふが如くにあらせたまふ。正親町天皇は、手元不如意のゆゑに、踐祚の後三年に亙りて卽位の禮を催す能はず。やうやくにして、毛利元就の獻金に據りて大禮を擧行するを得たり。

一五六八年、信長（一五三四生）上洛して、足利義昭（一五三七生）を傀儡將軍とし、天下の權柄を握る。朝廷に大いに金銀を奉り、これに感じたまひける帝は信長を鍾愛せさせたまひて、淺井朝倉、義昭、石山本願寺との戰ひを敕命を以て講和せしむるなど、信長の戰略に加擔し給ふ。

然而、一五七三年、武田信玄病死するや、忽然として形勢改まる。無二の好敵手たりし信玄の世を去りたるに據りて、信長安堵の念や深かりけん、己れの下風に立つを潔しとせざる足利義昭を備後鞆に追放して室町幕府を滅ぼし、其の後一箇月を經ずして、淺井朝倉を屠る。

於是耶、もはや信長に比肩する武將なし。天津日嗣の御稜威を藉りずとも八洲に號令するに豈足らざるべけんやとて、一天萬乘の君に對し奉りて粗忽の儀あり。君は漸次信長を疎みたまふに至る。

正親町天皇皇長子を誠仁（一五五二生）親王とぞ申し上ぐる。信長、誠仁と入魂たり。そもそも親王宣下も一五六八年の儀にして、信長の獻上せる金子なくては叶はざりけんと噂せらる。而して、誠仁の第五皇子は信長の猶子たり。然則、信長は帝を降して宮（誠仁）を帝位に卽け奉らんと畫策し、主上を恫喝して退位を迫れども、君は屈したまはず。

一五八二年、本能寺の變出來して、信長排除せられたり。一說には主上の圖りたまふ所にして、光秀を使嗾したまひけるとぞ。

一五八六年、誠仁親王父帝より先に薨去あらせられ、尊號「陽光院」を賜はる。誠仁嫡子・和仁（後に周仁）、父宮薨去の半年後に御祖父の帝より讓位ありて踐祚せさせたまふ。これ卽ち後陽成天皇にておはします。正親町上皇は一五九三年崩御。

信長は正親町帝と相爭ひ、皇太子誠仁親王を奉戴したれど、秀吉は後陽成帝に衷情を盡し奉る。自らの出自卑しきを、袞龍の袖に掩蔽せんとの意なりけん。一五八八年、聚樂第行幸の儀あり、秀吉一世一代の晴舞台の日をこそ迎へたれ。

扨、古來お家騷動とは、弟を後繼に任じたる後、實子の誕生を見て、廢嫡を志したるがゆゑなると少なからず。然れども、この時皇家には逆しまの段ありき。

後陽成帝には同母弟八條宮智仁親王おはします。一方、御自らの有力なる皇子は第一皇子良仁親王と第三皇子政仁（ことひと・まさひと）親王。始めは良仁を太子たらしめんと欲したまひけれど、秀吉薨ずるや、これを廢して、八條宮を皇太子たらしめんと願ふ。然りといへども、朝廷も豐家も擧つて異を立てたるがゆゑに斷念したまふ。關が原の戰の後、事を家康に諮りたまふに、家康は八條宮に讓位の儀はあるべからず。第三皇子政仁親王へ讓位あるべしと強く奏請あり。つひに政仁に讓位、これ後水尾天皇なり。家康の八條宮を忌避したるは、宮かつて秀吉の猶子となりたまひしがゆゑなり。八條宮は桂宮初代にして、桂離宮を造營したまひけるの御方なり。

不可思議なるは、良仁は卑母の所生、政仁は近衞前久女前子（このゑさきひさのむすめさきこ）の所生なれば、何爲當初より政仁を選定せざる、との疑念なり。あるいは、殊更に政仁を嫌惡したまひけるか。あるはまた近衞家に含む所あらせたまふか。

一六一一年政仁に御讓りありて、政仁は後水尾天皇となる。その六年後に後陽成崩御あらせたまふ。また、政仁の同母弟は叔父・信尹の養子となつて近衞信尋と名乘り、後に一の人（攝關）に任ぜられて皇別攝家の祖となる。この人、當代無雙の美男と譽高ければ、御兄後水尾も容儀優れたまひしにあらずや。

後陽成・後水尾の父子は確執ひとかたならぬものありき。父院崩御あらせられんとするのとき、後水尾天皇は仙洞御所に行幸して伺候あらせたまふ。、父院、今大自ら逝世したまはんとするに、龍顔を御覽じあらせらるるや、プイと御顔を背けたまひしと傳へらる。

なほ、この讓位ありて、後水尾踐祚したまひける一六一一年に、家康、大坂の秀頼に上洛あるべしと通達す。己に膝を屈せしめんと圖りたるなり。淀殿は斷乎拒絶せんとするに、加藤清正必死に懇願し、つひに秀頼（十九歳）大坂を出で、二條城にて大御所（七十歳）に對面の儀あり。豈圖らんや、秀頼は踐祚の儀に參内することなくして、大坂へ歸る。洵に面妖なる仕儀なりき。

（平成三十年十月十九日受附）